

小松帯刀なくして 明治維新なし —雄藩薩摩の知恵袋—

帯刀は、幕末維新のプロデューサー、フィクサー、監督、教育者、脚本家、演出家のすべてをこなした立役者である。

西郷隆盛・大久保利通・坂本龍馬の育ての親役としての、彼の存在を明らかにする。

1 薩摩藩の家臣団

島津藩の当時の藩組織がどのようになっていたかを知らなければ、帯刀の存在価値はまず理解できない。家臣団は島津宗家を筆頭に次のような家格で形成されていた。



▲小松帯刀像

1 御一門家(4家)

- ・重富島津家(大隅重富領一万四千石、一門家筆頭)
- ・加治木島津家(大隅加治木領一万七千石、一門家二位の家格)
- ・垂水島津家(大隅垂水領一万八千石、一門家三位の家格)
- ・今和泉島津家(薩摩今和泉領一万五千石、一門家四位の家格、天璋院篤姫の実家)

2 家老家

- ・日置島津家(薩摩日置領主九千石)
- ・宮之城島津家(薩摩宮之城領主一万五千石)
- ・帖佐島津家(大隅帖佐領主千七百石)
- 他、5家

3 家老格家

- ・都城島津家(日向都城領主三万九千石)
- ・平佐北郷家(都城島津氏の分家、薩摩平佐領主八千二百石)
- ・知覧島津家(薩摩知覧領主、石高不明)
- その他、永吉島津家、佐志島津家、新城島津家、花岡島津家

4 その他の氏族

- ・種子島家(大隅種子島領主一万一千石)
- ・肝付家(薩摩喜入領主五千五百石)
- ・小松家(薩摩吉利領主二千六百石、平清盛の長男重盛の直系氏族)
- その他入来院家、敷根家

前記1の御一門4家は、徳川で言えば親藩大名である尾張、紀伊、水戸の御三家に該当し、役職には就かず島津宗家の血筋が絶えた時に、宗家を継承できる家柄で別格の扱いであった。

2 鎌倉時代から戦国時代までの 薩摩勢力関係

元来、島津家は平安時代には摂関家筆頭の近衛家げしの下司であった。平安時代の後期近衛家の薩摩荘園の荘官として京都から九州に下向したのが始めといわれている。当時、薩摩には大伴氏きもつきの後裔の肝付氏が大隅半島の大豪族として君臨していた。さらに垂水には伊地知氏、日向には伊東氏が強力な水軍を背景に薩摩を支配していた。14世紀半ばには、肝付水軍が島津の守護所のある鹿児島に攻撃を仕掛け大勝利をしている。当時、島津氏は薩摩の一豪族にすぎなかった。

島津家が力を付け出したのは、関ヶ原合戦(1600年)の20年ほど前、15代島津貴久の頃からである。貴久の子には兄義久と義弘含め4人の男子がいた。貴久は九州の統一に乗り出し肥後の阿蘇氏、大隅の肝付氏、日向の伊東氏の戦いに相次いで勝ち、伊東氏は大友氏に走り、肝付氏は島津氏の家臣となった。

島津貴久の子の四兄弟は、豊後の大友宗麟を破れば九州一円島津氏で統一できた。が、そこに立ちはだかったのが豊臣秀吉であった。秀吉の近代武器に島津も連戦連敗を重ね、ついに降伏したのである。しかし、島津氏は秀吉の家臣になることで薩摩と大隅二国を安堵された経緯がある。

関ヶ原合戦において島津義弘は西軍に加担していたが、東軍の猛攻撃にもかかわらず最後まで持ちこたえ、東軍が勝利と決まるや否や他の武将には目もくれず家康本陣のみを目掛け一千八百足らずの兵で正面突破攻撃を仕掛け、その勢いは東軍の諸将を恐れさせ道を開けてしまったという有名な逸話が残っている。このとき井伊直政しんがけは我に返り追撃を命令した。島津の殿をつとめたのが甥の豊久であった。いまでも豊久が戦死した鳥頭坂には墓が立派に残されている。これにより、井伊直政や松平忠吉(家康の第四男)も負傷し2年後に怪我がもとで死去している。

小松家に話を戻すと、もとはは祢寝氏ねじめと名乗っていたが、

始祖である平重盛(平清盛の長男)が「小松の内大臣」と呼ばれていたことにより「小松」と二十四代清香きよたか(1767年)の時、改姓したと言われている。

この小松家は、薩摩吉利の領主で家格は肝付氏と同じく一所持(領主)である。家格は上記の役職を加味した区分け以外に、次のようになっていた。

- ・御一門(4家、私領主)
- ・一所持(21家、私領主)
- ・一所持格(20家)
- ・寄合、寄合並(60家)

以上が上士層である。下士層として無格(2家)、小番(約760家)、新番(約24家)、小姓与(約3000家)、与力などがあつた。この時期は、西郷家(47石)、大久保家(45石)、は小姓与の家格であつた。

3 小松帯刀の出自と育ち

小松帯刀は正しくは小松清廉こまつ きよかどで、小松帯刀は通称である。官位は玄蕃頭である。1835年、喜入領主肝付兼善きもつき かねよしの三男として生まれる。母は島津久貫しまづ ひさぬきの娘である。

肝付氏も大隅半島の大豪族で、肝付兼統は鹿児島きもつき かねもりの島津氏を戦いで破っている(1566年)。しかし島津貴久の反攻で兼統の子である肝付兼護は島津氏に臣従した(1574年)。しかしながら兼護は関ヶ原の合戦で戦死してしまった。しかし島津家からは重用され、肝付領主として鶴ヶ城東角に二千二百二十四坪の敷地を与えられている。

また、小松家も平清盛の長男重盛の直系の末裔まつえいで、薩摩吉利領主として鶴ヶ城正面近くに二千三百七十二坪の敷地を与えられている。両家はほんの百米も離れていない位置に屋敷を構えていた。

各領主は鹿児島在住を義務づけられ、領国はその陪臣が管理していた。島津家は各領主の連邦国家であつたのである。

小松家当主、小松清猶きよなおは島津宗家の当主島津斉彬の命で琉球へ出張中、27歳の若さで急死してしまうのである(1855年)。清猶を重用していた斉彬は、肝付尚五郎即ち後の帯刀に小松家の養子となるよう命じて

小松家の存続をはかったのである。

帯刀(このころ実際は尚五郎であるが、以降この名に統一する)は、領主家の子息なので乳母がついていたが、乳母と両親が不仲であったため両親の愛情をあまり受けられなかった。しかし性格は大変温厚で、肩書を笠にして話すタイプではなかった。こんなエピソードがある。

薩摩は温泉が豊富に出るので帯刀はよく温泉に行ったが、農民が行くような下級な温泉に好んで行ったそうである。庶民はそこに領主の御曹司がいるとも知らないで、行政等々いろんなことについて本音で仲間と話している。帯刀は湯船の端で何食わぬ顔でその話を聞き、領民の不満等を統治に反映させていたという。

しかし御付の家臣は帯刀のお護りが大変だったそうである。乗馬が得意のせいもあって、どこへでも一人でふらっと出かけてしまったり、また誰にでも身分を明かさず話しかけるので、四六時中目が離せなかった。また、娯楽として相撲を開催したりして民百姓と無礼講で酒を飲み語らっていたので「小松家の名若君」として領国の人に慕われていた。また、在地家臣よりも領国の世情をよく知っていたので、在地役人は逆に帯刀から思いやりある統治をするよう薫陶を受けるほどであった。

この結果、大変住みやすいのは肝付の領国と、薩摩、日向では当時言われていたそうである。学問においては、10歳ごろから横山安容に儒学を学び、昼は藩校の造士館に通い、夜は八田友紀に歌道を習い、和歌は香川景樹に師事した。生得のすぐれた才能と相まって薩摩一の秀才となっていた。

4 島津斉彬との出会い

島津斉彬は、島津宗家を継ぐ者として江戸生まれの江戸育ちである。従って世界の情勢、特に中国がアヘン戦争で欧米列強の食べ物にされ植民地化されてゆく様を見ていた。次は我が国である。早く開国をして欧米列強に負けない国造りをする^{じょうい}ことが急務であると考えていた。幕府が鎖国を主張し攘夷をいくら叫んでも、近代兵器を備えた欧米列強が武力で対抗してきたら、我が

国は明らかに中国のように負けて、植民地にされることは目に見えていた。「井の中の蛙大海を知らず」とはこのことである。28代

藩主島津斉彬は、老中首座の阿部正弘に富国強兵をし、まずは軍制改革が急務であると訴えた。そして薩摩にも洋式軍艦、反射炉、溶鉱炉の建設、地雷、水雷、ガラス、ガス灯などを製造する集成館を創設した。

斉彬は、今までのような家格に拘っている時ではないと考えていた。そこで、儒学者である横山安容に優秀な人材を相談した。彼は小松帯刀と西郷隆盛を推薦した。さっそく斉彬は自ら検分するため別々に登城を命じた。帯刀は、突然のお呼び出しとはいかなる事態か考えながら登城した。

斉彬「そちは今の我が国の有様をどう考えているのか意見を聞きたい」

帯刀「今、この薩摩にも外国帆船が出没して来ております。ご存じのように薩摩は琉球と交易をしております。しかし外国は薩摩の開港と直接交易を求めています。対等に^{かな}交易を進めるには、今の薩摩の軍備では到底適うとは思われませぬ」

斉彬「では聞くが、今薩摩はなにをすべきか」

帯刀「まずは人材育成と軍備の増強を早急にすべきと考えます」

斉彬「人材を育成し軍備を増強すると言っても、その指導者をどのようにして招聘するつもりか」

帯刀「理想を言うことは簡単ですが、具体的な筋道となると難しいところです。しかし先日、8年程前に漁に出て遭難し、アメリカの捕鯨船に救助され8年程アメリカで暮らして、今琉球に帰国して来た者がおります。英語が堪能で西洋事情に詳しい者なので現在もこの薩摩に逗留させております」

斉彬「名は何と申すか」



▲尚古集成館

帯刀「ジョン万次郎と本人は申しております」

斉彬「一度会って話を聞かせるよう申しつけよ」

帯刀「人材育成としては、薩摩より海外留学生を送り出したいと考えています」

斉彬「密航は、鎖国下の我が国では禁止されている。それでは薩摩藩が危うい」

帯刀「ご心配は無用でございます。留学生は一旦脱藩させ、琉球に渡らせて一ヶ月ほど琉球に潜伏させ折を見て、琉球にきた外国船に潜り込ませるのです」

斉彬「そうか、それはよい考えじゃ。さっそく人選に取り掛かれよ」

5 老中首座阿部正弘との幕政改革

斉彬は、老中首座阿部正弘と相談。幕政の仕方を日本の近代化に舵を変更させる。幕政改革に乗り出すことで意見は一致した。それには、病弱な現十三代将軍家定の正室をこちらから送り込み、御政道まで意見する大奥の改革をも兼ねようと目論んでいた。

その適任者として白羽の矢が向けられたのが、水戸徳川家から一橋家に養子に入っていた一橋慶喜であった。しかし慶喜の父親の水戸斉昭は大奥の贅沢三昧を幕閣に戒めるよう言上していたので、大奥側としては水戸斉昭に対抗すべく紀伊の徳川慶福を推挙した。そして譜代筆頭の井伊直弼を幕閣に入閣させた。大奥側は賄料を減らさせないための画策であり、斉彬とは動機がまったく違い不純であった。井伊直弼も権力を持つため、大奥側を利用したと言える。

しかし、1857年、阿部正弘は急死してしまったのである。一橋慶喜擁立派は後ろ盾を失い大変不利な状況下におかれた。確証はないが、紀伊派による毒殺と思われる。後ろ盾を失った斉彬は独自で幕閣を動かし、将軍家定に篤姫を正室として嫁すことに成功した。大河ドラマでたいへんな好評を博した『天璋院篤姫』である。

この成功は、小松帯刀の活躍なくしては成し得なかったであろう。この正室の候補者として、斉彬は今和

泉家の敬子^{すみ こ}を選択した。

将軍家定に嫁すには、幕閣そして有力大名の同意が必要である。この裏工作を、斉彬は極

秘のうちに仕上げるよう小松帯刀に託した。斉彬は帯刀の近習として西郷隆盛を取立てて、小松帯刀の薫陶を受けさせ西郷隆盛は帯刀のため存分に働いた。将軍の正室は公家から輿入れするのが慣例であった。

そこで、まず斉彬は敬子を自分の養女とした(大名家の出身でなければならなかった)。そして名を篤姫^{このえ ただ ひろ}と改姓した。そして斉彬は、姉が近衛忠熙に嫁していたので、五摂家筆頭の近衛家の協力を取り付け近衛家の養女とした。小松帯刀は西郷に作法等々を一から十まで教えた。西郷はただの使い走りであったが、西郷がこのすべてを取り仕切ったように記録されている歴史書もある。これは後に明治時代の軍部が彼を元勳に祭り上げるため、歴史を書き換えたのである。このときも、実際は小松という薩摩藩筆頭家老の帯刀がすべてを動かしているものであり、四拾七石取りの下級武士西郷が薩摩藩筆頭家老小松帯刀の使いという名目がなければ、公家それも公家五摂家筆頭の近衛屋敷に一步も入ることさえできない格差社会であった。

話を戻すと結局、井伊直弼が大奥側をバックに大老に昇格し、井伊直弼の強権発動により将軍は紀伊家の徳川慶福^{よしとみ}と決め、第十四代将軍となった。ここで慶福は家茂と名を改めた。将来「和宮」が正室として嫁す将軍である。

6 島津斉彬の死

将軍擁立に敗れた斉彬は、井伊直弼の旧態的な幕府の強権発動を見かねていた。このまま井伊直弼に政権を執らしておけば、中国と同じ手口で最終的には武力で諸外国に制圧され、植民地とされる危機感をいだ



▲桜島

いていた。藩兵五千を率いて幕閣に抗議行動を決行することにした。

しかし彼はこの練兵を観覧中に倒れ、享年50で死去したのである。これも正確な資料はないが、毒殺されたものと私は考えている。斉彬の男の子息は皆亡くなり、もう助からないと悟った時、弟久光とその子の茂久を枕元に呼んで、弟の久光に

「藩主は茂久に譲るが、久光わしの志を引き継いでくれ。朝廷を中心に各諸侯が一丸となって新しい国家をつくり、外敵からこの国を護るのがわしの志である。途中で死んでゆくのは残念だ。しかしこれも運命かもしれぬ。後は頼んだぞ」「兄者、元気になってくれ」

と言うのが久光には精一杯であった。涙が止まらなく言葉にならなかった。

遺言により藩主は茂久に決まったが、年齢が19歳と若いので、父親久光（斉彬の異母弟）が国父となって権力を握った。

「予（久光）は、兄者の御遺志をついで、朝廷を中心に將軍や諸侯が一つになって新しい日本を再興し、外敵から護る仕事を成し遂げようと考えている」

と宣言した。彼が斉彬の遺志を理解し実行しようとしたことは、たとえ薩摩^{ひってき}にあっても世界情勢を把握し、学問、見識にも優れた、斉彬に匹敵する人物であったと推察する。一方、幕閣の大老井伊直弼は、幕府の意向を非難する勤王派を幕府に対する反逆罪として問答無用で捕縛し抹殺していった。

7 安政の大獄

大老井伊直弼は、勅許を得ないまま日米修好通商条約に調印し、強権を発動して將軍を紀伊家徳川家茂^{よしとみ}（慶福）とした。これを井伊直弼の独断専行だとして、反対した者たちへの大弾圧である（主な受刑者は右欄参照）。

8 薩摩藩の勢力図の変化

[主な受刑者]

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| ・梁川星巖
(逮捕前日コレラで死去) | ・吉田松陰
(長州毛利家家臣 斬罪) |
| ・橋本左内
(越前松平家家臣 斬罪) | ・頼三樹三郎
(京都儒学者 斬罪) |
| ・安島帯刀
(水戸藩家老 切腹) | ・鵜飼吉左衛門
(水戸藩家臣 斬罪) |
| ・茅根伊予之介
(水戸藩家臣 斬罪) | ・梅田雲浜
(小浜藩家臣 獄死?) |
| ・飯泉喜内
(三条家家臣 斬罪) | その他数十名が
獄死している。 |

[隠居・謹慎]

- | | |
|----------------------|---|
| ・一橋慶喜
(一橋徳川家当主) | ・徳川慶篤
(水戸藩主) |
| ・徳川慶勝
(尾張藩主) | ・松平春嶽
(福井藩主) |
| ・伊達宗城
(宇和島藩主) | ・山内容堂
(土佐藩主) |
| ・堀田正睦
(佐倉藩主) | ・太田資始
(掛川藩主) |
| ・川路聖謨
(江戸城西の丸留守居) | ・大久保忠寛
(江戸城西の丸留守居) |
| ・中山信宝
(水戸藩家老) | ・土岐頼旨
(大目付・海防掛) |
| ・石河政平
(一橋徳川家家老) | ・本郷泰固
(川成島藩主・若年寄 一万
五千石から五千石に減
封、川成島藩消滅) |

[永蟄居]

- ・徳川斉昭
(前水戸徳川家藩主)
その他、お役御免、譴責、重追放、押込等大量の処分者をだした。この個人的な政敵を、このような卑怯なやり方で政道と称して排除することは、為政者として為してはならないと思う。

島津斉彬は、家老を島津豊後派（保守派）から進歩派の日置の島津左衛門に変えた。そして、教育、軍備、産業等に力を注がしめ、磯浜に集成館をつくり、武器、艦船の近代化をはかった。

小松帯刀には、青壮年の下級武士の統率を命じた。彼はとくに下級武士で組織された誠忠組に信頼されており、彼らも上級武士以上に薩摩のこと、日本の国家体制の在り方を考えていた。帯刀は彼らの志と自分の考えが近いことに気付いていた。

しかし、日置島津左衛門は、役職を自派の者に優先的につけ、誠忠組には冷遇した。誠忠組には、西郷隆盛、

大久保利通、岩下^{かた ひら}方平が在籍し、純忠至誠の行動派であった。西郷らは、日置派から離れ日置島津派に対抗できる力と家格をもった小松帯刀に接近していった。

このような状況下、「桜田門外の変」が起きたのである。斉彬が逝去して2年後のことである。この桜田門外の変後、幕閣では、井伊直弼の率いる南紀派が一掃され、彦根藩は登城中に幕閣筆頭が暗殺されたことは、幕府の威信を大きく損ねたとして30万石から20万石に減封。護衛した家臣全員切腹となった。しかし、幕府への届け出は病死となっている。幕府自身は大老が門前で暗殺されたことが、幕府の体面をひどく潰すことを恐れたのであろう。

安政の大獄で処分を受けた者は、全員赦免され再び一橋派が幕閣の中心となり近代化に取り組みだした。一方、薩摩藩では島津久光が日置島津左衛門を罷免し、小松帯刀を家老の筆頭としほぼ藩政の全権を託した。島津久光という男、人を見る目は優れていた。この帯刀の登場によって、一層薩摩藩が幕府以上の力をもつに至ったことは偽りのない事実である。帯刀は、藩の十以上ある掛の一つ一つに最適任者をおき、実にあざやかに藩政を切り回した。近代化には莫大な費用がかかるが、琉球・清国はじめ諸藩とも交易を盛んにし、この交易で得た莫大な資金を教育、軍備の近代化に使った。

薩摩は当時、日本では最強の近代国家になっていた。また、久光は性格も温和であるが、決断は速かった。久光は小松帯刀を家老とし、重要ポストをすべて小松の担当にしたのは、それなりのきっかけがあった。斉彬と同様に帯刀の考えに自分の志が似通っていたからである。

9 帯刀の経済政策

国父として実質の権力を握っていたのは、久光であった。彼は、帯刀を呼び出し意見を求めた。

久光「帯刀、今の世界情勢からみて現在の幕藩体制はいかがとそちには映るか」

帯刀「世界は、文明、技術、軍備にいち早く力点を置き文明国家に変貌しております。文明の進んだ外敵が、日本の近海に押しかけて来ているのに、幕府は鎖国

を続け、軍備も西欧列強に比較すれば百年以上遅れております。ここで相手の状況も知らず戦争にでもなったら、立ちどころに敗れて植民地化され申す」

久光「その通りじゃ。幕閣の連中の頭の中は関ヶ原合戦当時から一歩も進んどらん」

帯刀「殿の仰せの通りだと思います。精巧な武器・軍艦を動かすには、まずイギリス、オランダの文明を取り入れ、人材を養成せねばなりません。英語やオランダ語の教師も必要であります」

久光「わしも同意見じゃ。造士館や演武館の教育方針を変えて、洋学を学ばせ進んだ兵器を造らねばならぬ」

帯刀「それには莫大に資金がいりまする」

久光「金をつくる方策を知っている人材など、なかなかおらぬぞ。そちによい考えはないか」

帯刀「御用商人に、琉球の砂糖や唐物商売、出羽の米を買い付けて大坂で売りさばかせます。藩も御用船を御用商人に貸出、他藩と交易させ上納金を徴収するのはいかがでしょう」

久光「それだけの大商いをできるのは、指宿の浜崎太平次しかおらぬのう」

帯刀「そうです。浜崎に相談し、乗ってくれば垂水の田辺・阿久根・志布志の船主も話に乗ってくるでしょう」

久光「良い案じゃ。すぐに実行せよ」

帯刀「これだけの仕事、私一人ではできません」

久光「わかっておる。そちが筆頭家老として各掛の実行責任者を選べ。わしはそれを追認する」

10 豪商浜崎太平次

浜崎太平次は、大坂・江戸の豪商を抑えて天下一の豪商と、寛政年間の長者番付に載っている。当時の豪商と言われる263名の中でのトップが薩州指宿を本拠地に行っていることは薩摩藩にとっても好都合であった。

浜崎太平次は、単なる御用商人ではなかった。小松帯刀が欧米でも最新式銃のミニエー銃を購入するときでも、浜崎太平次は率先して二万両もの献上金を差し出した。これをみて他の豪商も献上金を差し出してきた。

合計34名で、十二万千三百両が集まった。これも小松帯刀を信用してのことであった。

しかし、この太平次も文久三年(1863)、大坂へ行った際大坂支店で病となり、帯刀の願いより孝明天皇が自らの侍医を派遣くださり診察したが、太平次はこの聖恩に感激しつつ帰らぬ人となった。享年50であった。これも、薩摩藩筆頭家老小松帯刀が天皇に拝謁できる身分であったからである。薩摩藩が、朝廷にも幕府にも、藩の言い分を聞かざるをえないほどの影響力をもちはじめた証拠である。



▲鶴丸城の案内



▲島津家居城の鶴丸城跡

艦長、副艦長即死。敵は大打撃を受け先方の戦死者は薩摩兵が21名に対し、敵は戦死13名負傷者68名であった。英艦は戦列が乱れ、砲撃をやめて桜島の陰に退いた。そこへ桜島からの砲撃が背後からあり、残った艦が山川沖からホウホウの体で逃げて行ったのである。薩摩の大勝利である。

この薩摩の大勝利は、外国列強におおからず影響を与え薩摩藩に一切手出しはしなくなったのである。そして、帯刀は英公使に対して大名行列の通行の通達を忘れていた幕府の不行届をわびて、家族扶養料として今に換算して一億五千万円支払うことで合意した。

英国国内でも国民の感情の変化があり、最初は薩摩を攻撃すべきであるとの一辺倒であったのが、次第に詳細等々が英国国民がわかるにつれてマスコミの報道も変化していた。騎士道精神から言えば、商人リチャードソンの行為は日本国民を侮辱するものであり恥れつな行為である、という世論が英政府に向けられていた。そして、最強と言われた英艦隊が一地方貴族に負けたとあっては国民の突き上げが一層高まってきたので、小松が家族への扶養料を出す提案に飛びついたのが実態ではないかと思われる。それから、帯刀は英国に対等の通商を呼びかけたのである。英公使も面目が立ち、お互い長崎のグラバー商会を通じて最新の武器・大砲・弾薬を供給することを帯刀は英国に約束させたのである。これも小松帯刀にしかできない外交術である。

今回は禁門の変から書き下ろしたいと思います。

※文中の写真は筆者撮影

(2014.11.26) 共立総合研究所 特命研究員 三矢 昭夫

11 薩英戦争

文久二年(1862)、江戸より島津久光の大名行列にイギリスの生糸商人4名が横切り薩摩藩士の制止を聞かず横切るばかりか、行列のど真ん中を久光公の駕籠に近づこうとしたので、無礼討ちにした生麦事件が発生した。イギリス公使館は幕府の外国奉行津田正路に対し、なぜ大名行列が通行することを連絡してこなかったのか幕府の回答と犯人の引き渡し、幕府の謝罪と十万ポンドの賠償金を要求してきた。幕府は謝罪し賠償金を支払った。

井伊直弼が締結した日米通商修好条約は、我が国にとって屈辱的な治外法権、横浜等の開港など諸外国から馬鹿にされるような国家威信の欠片もない不平等な条件で締結されていた。イギリスは、図に乗って薩摩藩にも治外法権を盾に犯人の引き渡しと賠償金二万五千ポンドを要求してきた。これに対して、小松帯刀は敢然としてすべてを拒否した。

こうしてイギリスとの戦いが始まった。イギリスは東洋艦隊の軍艦七隻が谷山沖に停泊した。帯刀は旗艦ユーライアス号のジョスリング大佐に上陸して交渉せよと要求したが応諾しなかったので、交渉決裂と判断し小松帯刀を総指揮官として交戦をはじめた。このとき、帯刀の軍備増強と練兵の効果が発揮された。

敵の旗艦に島津の砲弾が数発命中し、敵の旗艦の